



さりげないスナップ写真のすてきな笑顔のように  
群馬の教育や文化の話題を、ふだん着のままで紹介するシリーズ



# 主体的に学ぶ生徒たち

## ～富岡高校ブックトークと黒門プロジェクト～

12月6日(火)、群馬県立富岡高校を訪ねました。富岡市といえば今は世界遺産にしようと運動が高まる富岡製糸場がある街。車で走っていると、あちこちに富岡製糸場の案内表示が目に入ります。富岡高校の正門を入ると左前方に風格のある建物が見えました。通称「御殿(ごてん)」といわれる旧七日市藩の藩邸です。藩邸の前には石橋の架かった池があり、黒門と呼ばれる立派な門があります。紅葉した楓が黒門と絶妙なコントラストを描いていました。

今回の目的は、図書委員会が行っている「ブックトーク」(テーマに沿った本の紹介)と「黒門プロジェクト」といわれている進路指導プログラムの「テーマ研究」についての取材です。取材班は須田、瀧口、長谷川の3人。

## 1. ブックトークで読書への興味関心を呼び覚ます

司書の柏木彰子先生の案内で図書館にいくと、貸し出しカウンターの上に少し痩せた文字で「図書館」と墨書した額が掲げてありました。揮毫した人は卒業生の阿部真之助氏でNHK初代会長です。ちなみに画家の福沢一郎氏や初代水戸黄門役の俳優東野英治郎氏を輩出している伝統校、校長室には福沢一郎氏の絵が飾ってありました。

図書館は昼休みということもあり、本を探



す生徒、区切られた学習機で勉強をしている生徒たちがたくさんいました。実に静かな図書館です。



司書の柏木彰子先生（右）

取材目的の一つである『ブックトーク』について、司書の柏木先生から伺いました。「ブックトークとは、ある一つのテーマに添って、本を順序よく上手に紹介することで、本の楽しさを伝えるとともに読書への興味関心を呼び覚ますことがねらい」と言います。

1年生は進路への動機付けとして事業所・研究所訪問を実施しており、その研究成果を11月に体育館で発表しています。その行事の時間帯の約25分を使って「ブックトーク」が行われます。1年生の図書委員（5クラス10人）が決めたテーマに関係した本を15～20冊ほど出し合い、1年生全員とその保護者を対象にして、パワーポイントを使って1冊につき1～2分で紹介するものです。2005年度から始まり、今年で7回目となります。

#### 〈ブックトークテーマ〉

- 2005年度 「死について考えたこと」
- 2006年度 「僕たちが読んでいる恋愛小説」
- 2007年度 「血のつながりを考える」
- 2008年度 「Change」
- 2009年度 「不思議なこと」
- 2010年度 「成長」

## 2011年度のテーマは 「あきらめない」

この日は7時間授業ということで、図書委員が集まってきたのは午後4時30分でした。

2年生4人、1年生9人が集まってくれました。

最初に「立候補で図書委員に就いた人は？」と尋ねると、10人が手を挙げました。中学から読書が好きという生徒や、1年生の時に行った図書整理が面白かったからと2年生でも続けている生徒もいました。図書委員長の井上君（2年生）は、「大学で図書館学を学びたい。将来は図書館に関わる仕事をしたい」と明確な目的を持って任に当たっています。

今年度の「ブックトーク」のテーマは「あきらめない」ということになりましたが、まずはテーマ決定のところから聞いてみました。



図書委員長の井上君

「3.11の東日本大震災で大きな被害を受けた被災者たちのことがあり、『あきらめない』というキーワードがすぐ出てきた」と言います。他にも原発の報道にからんで「真実」という意見もあり、昼休みや放課後の都合5～6回の会議を経て決定したようです。

テーマが決まり、次はそのことに関連した本のノミネートが始まります。各自が今までに読んだ本を出し合い、15～20冊に絞っていきます。事前に柏木先生から聞いた話では、生徒が出したジャンル以外の本をさりげなく提示していくようにしているとのことで、いまの社会情勢やトレンドな話題を考えさせることを大事にしているようです。今年度のテーマ「あきらめない」からは次の本が紹介されました（合計21冊からその一部）。



書名	著者名	出版社
走れ!! T校バスケット部	松崎 洋	彩雲出版
阪急電車	有川 浩	幻冬社
嵐の季節に 思春期病棟の十六歳	ヤーナ・スライ	徳間書店
東日本大震災 心をつなぐニュース	池上 彰	文藝春秋
竜馬がゆく 全8巻	司馬 遼太郎	文春文庫
正義とはなにか	斎藤 規	ポプラ社
市民科学者として 生きる	高木 仁三郎	岩波新書
モチモチの木	斎藤 隆介	岩崎書店
ポケット詩集	田中 和雄 編	童話屋

小説だけでなく、ノンフィクションや科学、童話など様々なジャンルから選んでいます。本が決まると発表にむけてのシナリオが作られ、各自が1分くらいで紹介できるように原稿を作っていきます。



## 図書館は「居心地のいい空間」

体育館での発表では「緊張した」と言っていました。DVDを見るとしっかりしたナレーターの運びで、要領よくまとめて発表していました。

Q:「ブックトーク」から学んだことは?

A:本をもっと知ろうとする気持ちになった。

A:いろいろなジャンルがあることが分かった。自分の好きなジャンルだけでなく、勧められると読む気になった。

Q:図書館とはどんなところ?

A:宿題と部活に追われ、本を読むのは睡眠を削るしかない。でも本が好き

だからそれが出来る。いま学校図書館は予算が削られ十分な本の購入が出来にくくなっている。居心地のいい場所として充実したものにしていきたい。

とてもしっかりした答えが出てきたのでビックリしました。

卒業後訪れたある生徒は「僕はあの頃、この空間が好きでした。…」と語り、卒業後自殺未遂をしたこともあると打ち明けてくれたそうです。司書の柏木先生は言います。「図書館には本がある。知りたいという欲求を満たしてくれる宝物がある。利用者は本の扉を開く。文字がある。挿絵がある。ひとり静かに読む。それは自分と向き合う時間。自分の嫌な面、好きな面が見えてくる。それが本の力です。私たち司書は、宝物と利用者を結びつける。あとはそっと見守る。それが人の力です。そして図書館が持つ雰囲気自殺願望者に居場所があるよ、と感じさせてくれるのかもしれない。」

活字離れがいわれる昨今ですが、知的好奇心を高め、人間形成の場として正に「居心地のいい空間」となるよう、これからも活発な活動を期待して取材を終えました。

(文責:須田 章七郎)



図書委員の  
みなさん

## II. 進路をみつめて…「テーマ研究」（2年生）

富岡高校のホームページの『黒門プロジェクト』という言葉に興味を惹かれ、進路指導主事の関根正弘先生から概要を説明していただきました。

「これは富岡高校オリジナル進路指導プログラムのことです『サクセスシステム』（学習支援策）と『ドリームプラン』（進路意識高揚策）に大別され、それらは自転車の前輪と後輪のようにうまくかみあって『なりたい自分』の進路を実現するプランです。それぞれに具体的な手だてが用意されていますが、私たちはドリームプランに位置づけられている『テーマ研究』に注目しました。これは、①興味・関心のある事柄について、調べ、考え、まとめ、発表することを通じて自分から問題を解決する経験をする ②自分の進路や将来について、自分や学友のテーマ研究を通じて深く考えることにより、知識の蓄積にとどまらない『真の学力』を養うことが目的です。1年次1月のテーマ決定から始まり、2年次9～10月の研究成果の発表に至る取り組みです。生徒全員が主に『総合的な学習の時間』の授業を活用して取り組みますが、校長先生をはじめとする全教師（3年生の正担任と学年主任以外）が系統別担当者としてアドバイスにあたります」。

多くの生徒を担当し指導する先生方は、専門外の分野の指導など、ご苦勞もあると思います。



進路指導主事の関根正弘先生

今年11月12日（土）に行われた「テーマ研究」全体発表会では、10名の代表が、

1・2年生全員の前で発表しました。12月6日の取材にあたっては、そのうち6名の生徒に集まってもらって座談会風のインタビューをしました。



**なぜその研究テーマ？調べてみてどうだった？**  
＜研究テーマとなぜそのテーマにしたのか、どう調べたか、苦勞など聞かせて下さい＞

### 新井達也君＝快適な建築空間について

#### —心理学の視点から

将来建築をやりたいので、調べてみたいと思ったからです。ただ漠然と建築ということではなくて、自分達は今、キッチンとか空間を分けているんだけど、なんで分ける必要があるのか、なんでこの空間でこれをやるのかとか。建築は理系の分野なんだけど、別の視点から研究することで新しい発見に結びつけていけるといいなあと思ったのです。

まずは、建築の基本的なことを調べて、心理学は心理学で調べていって、共通している部分を探して関連させていきました。発表では、図を使ったり、何も知らない人にもわかるように簡略化しました。

### 岡部知矢君＝酒税について—歴史と現状

進学したいのが経済なので、どういうものがつながるかと考えて頭に浮かんだのが税金で、その中で興味を持ったのが酒税です。大人になって飲むと思うし。情報源が

インターネットだったので、正確さに気をつけました。いくつかの資料を照合して、あやしいものは避けて。不確かな情報はみんなにウソを伝えることになるので。

### 井口和穂君＝植物の育つ土に関して

大きな理由は、環境問題です。人間は自分達が過ごしやすいように環境を変えてきたけど、植物は自分で環境を作れない。環境をどうするか対処できるのは壊した人間なので、植物が育てられるような環境を取り戻したいなと思って。最低条件、植物がどうすれば育つかということを知っておきたいなと思って調べました。ピーマンを種から育てたりしました。6月の台風で全滅しましたが(笑)。自分は歴史を調べるのが苦手で、今現在の肥料に至るにはどういう過程があるのか、調べるのが一番大変でした。

### 武井直也君＝少子高齢化について

ニュースとかでもよく見るので、やはり気になって。解決策は、子どもをもっと産む必要があるし、結婚に対する意識が最近 is 落ちているので、意識を高めていくことが大切だと思います。仕事優先で、女性も仕事優先。お金の面でも結婚してその後の生活が安定するかどうか保障されない。そういう自分の主張も述べましたが、町の人にいくつかアンケートをとりました。アンケートをとるのは結構大変でした。

### 高橋宏太郎君＝学級崩壊について

小学校の時にクラスでいろいろ問題があって、先生の方にもこれはどうなのかなと思うことが時折あったので、平和な学級をつくるにはどういうふうにすればいいのかということを考えたからです。もう一つの理由は、去年の秋頃、桐生で小学生が自殺をして、いい学級にするにはどうすればよいか、教師には何が求められているのかを

気にするようになったことです。自分は教師になろうと思っています。問題が起きていてもそれを放置していることが荒れる原因につながっている可能性がある。教師に求められる一番大事なことは、細かいところまでしっかり耳をすませて、ささいなことでも見逃さない対応をすることだと思います。学級崩壊の定義について最初にまとめた上で、何が原因で学級崩壊が起こるのか、それに対する対策をどうすればいいのか、ということの本の意見を参考にして自分でまとめました。暗いイメージだったのですが、現実問題として起こっているのだから、みんなに考えてもらいたいと敢えて選びました。



### 下山智士君＝数学の苦手意識の発生について

将来の夢が数学の教員になるということなので、将来に役立てたいなと思って調べました。例えば公式を例にとると、出来る人は公式の内容までしっかり理解しているんですね。逆に出来ない人は、ちゃんと自分の中に内容を落としていない。他の分野になってもその公式が使えてない。授業でわからなくてもそのままの状態ですませているから、苦手が発展していく。最初は外的な影響というか、教員が悪いところから攻めようとしたのですが、その人の状況によって違うのかなとも思うようになって。最初はインターネットで調べていたのですが、どこかの学校で先生と授業に対してアンケートをとっていて、先生の苦

手と生徒の苦手の一致点・違う点が出ていて、これはおもしろいなと思って、とりあえず生徒にだけアンケートをとってみました。現場の声を中心にしようと思って。二回にわたってクラスの生徒にアンケートをとったのですが、アンケート自体は快く引き受けてくれたのですが、回収と集計が非常に大変でした。

## 「新しい発見」「勉強そっちのけで、楽しく学べた！」

<やって良かったことを話して下さい。>

- ☆ 調べていくうちに、いろんな方面につながられる、新しい発見がありました。次はこれを調べてみようかなと興味を広げられたので、よかったです。
- ☆ 発表する形が、大学や会社でもプレゼンの練習になると思います。しっかりここで形をかためて、時間内におさめる。自分の言いたいことをちゃんと伝えるか、自分の力を試す良いきっかけになりました。時間内に自分で興味を持ったことをうまくまとめられる能力を身につけるいい勉強になりました。
- ☆ 自分の知りたいこと、好きなことをやるので、自分が好きなことは頭に入るのが早い。興味を持つとどんどん深く知りたくなり、授業よりも楽しく学べる機会だったのではないかなと思います。勉強そっちのけでやっちゃいました。
- ☆ テーマ研は必要だと思います。歴史関係だったのですが、授業でなんとなく学んでいたことが、自分で調べたことが出てくると結びつくので、授業の内容も頭に入りやすい。
- ☆ テーマ研で調べた内容が推薦入試で強みになったと先生から聞きました。大学の専門のところを高校のテーマ研で学んでおくことで、将来役立つと思

ます。

- ☆ 知識だけではなく、熱意とかも、自分がどういうふうに生きればいいのかということも考える機会になりました。

生徒の言葉は、このテーマ研究のねらいである『真の学力』が育ちつつあることを裏づけているように感じました。もちろん全部の生徒がそうとは言えないでしょうし、中にはインターネットからただ貼り付けただけのものを提出しようとする生徒もいるようですが、黒門プロジェクトの冊子によれば、真の学力とは、今までの学力と違う「さまざまな学問領域を深く学んで得た数多くの知識の蓄積、複雑化する現代社会の問題に関心を持ち問題解決しようとする意欲と態度、あふれる情報から確からしいものをより分けて自ら考え判断する力、学ぶ方法を知り自分の考えをまとめ表現して他人に伝える力」です。

振り返って、私自身の苦い経験を思い出しました。自分の中にある疑問を封じ、学ぶ目的もつかめないまま、ひたすら受験勉強に追われた高校時代を経て大学に進学した私は、おきまりの「五月病」に陥ったのです。一番のカルチャーショックは「あなたの意見は？」と問われるのが恐怖で、自分の意見や問題意識を持ってないことでした。もし私の高校時代に富岡高校のような学びの機会があったなら…と、述懐しつつ黒門を後にしました。

(文責：瀧口 典子)



(撮影・長谷川 陽子)